世界と出逢い認知が生じる
—生に向き合う認知科学の新しい方法—
Cognition is Constructed through Encounters with the World
- A Methodology of Cognitive Science to Deal with Actuality of Living-

諏訪 正樹
Masaki Suwa

慶應義塾大学
Keio University
suwa@sfc.keio.ac.jp

概要

情報処理モデルに準拠して研究を進めてきた認知科学は，状況に埋め込まれた認知（situated cognition）や身体性の思想の登場によって，研究のありかたを変えつつある．実験室に閉じこもって統制実験をするのではなく，心身を外界に連れ出して初めて生起する認知の能動性をうまく利用して，生きるアクチュアリティに向き合い，新しい知の姿を顕在化させるのがよい．

キーワード：situated cognition, 状況依存性，身体性，一人称研究，フィールドワーク

1. はじめに：認知科学の歴史

1.1 認知革命

認知科学は「認知革命」（cognitive revolution）をきっかけに1960年代に誕生した学問である．しかし，昨今の研究動向を拝見していると，認知革命の思想はいつの間にか霧散してしまった印象すら受ける．そもそも認知革命は行動主義心理学への反省から生じたものである．科学にならんとするあまり，客観的に観察できることだけを拠り所に学問をしようと目論見て，刺激信号とその反応として現れる行動のペアから心を推察するものであった．心の内側にある思考をブラックボックスにして認知研究を十全に行うことはできないという批判が高まった結果の革命であった．

心の内側をどう扱うか．それが認知科学に課せられた永遠の問いである．

1.2 情報処理モデル

コンピュータのメカニズムの提唱の後，認知科学や人工知能はそのモデルを採用して心を扱うことに乗り出した．外界から心にインプットされる情報（行動主義の刺激信号に相当する）を，ひとは知識で処理して思考（認識や意図）を生み出し，それに基づき外界に対する働きかけとしての行動（行動に相当する）を発現させる．知識を駆使して情報を処理することを「考えること」の近似モデルに仕立てたのである．いまでも情報処理モデルに準拠して認知科学研究を行う研究者は多い．

2. 認知の能動性その１：構成的知覚

しかしながら，1980 年代中盤以降，「状況に埋め込まれた認知（situated cognition）」の思想（たとえば[1]）が勃興し，それに伴い情報処理モデルの考え方はひとが生きる姿から乖離しているという考え方が生まれた．私もその主張を強く打ち出すひとりである．

乖離ポイントのひとつは，心身への刺激信号の入力は決して受動的なプロセスではないという点である．それは，むしろ能動的な知覚構成のプロセスである．

ダルメシアンの写真が荒い画素から成るためなんの画像なのか見えにくいのに，「犬」ということばを教えてもらった途端にぼわんと犬がみえはじめる．これは，その瞬間に感じている・考えていることに応じてひとが知覚を能動的に構成していることの証しである．外界信号のほとんどは捨て去り，現在の状況下におけるホットな思考に整合するような信号を厳選・活用し，知覚をつくりあげるのである．

情報処理モデルは，知覚が外界信号だけでなく，そのとき心で生じている思考に左右されて構成されるという事実を反映することができない．「知覚→思考の発生」の流れだけなく，「思考→知覚の構成」という逆方向の流れも，認知を構成する重要な要素である[2]．構成的知覚という専門用語はそれを表現したものである．

3. 認知の能動性その２：身体性

知覚の構成を促す要因は，その瞬間の思考や外界信号の他にもまだ存在する．身体の存在である．情報処理モデルは身体をもたない点で，そもそも大きな限界に直面していると言える．

身体は世界のなかの物理的な存在なので，いやがおうにも外界状況と物理的なインタラクションを起こす．坂を登ると足腰に負荷がかかり，筋力を使い，発汗し，呼吸が荒くなり，体内エネルギーを消費し，血液や体液の循環が変わる．脳による体内エネルギー管理は情動や感情にも影響を与え[3]，それは思考に，そして（先に述べたように）構成的知覚にも影響を与える．

また，急坂を登るときには体勢はふと前屈みになり，視線をやる方向は路面である頻度が高くなる．ときおり周辺環境や空への彷徨わせたりもする．すると，外界状況のなかで目に入るもの（つまり着眼）が変わり，思考や知覚の起こり方にも大いに影響を与える．

物理的な身体を有するがゆえに，身体がいま存立している状況に応じて，情動・感情・呼吸・循環系・体内エネルギー管理など身体のありさまが呼応し，思考・知覚がその場でダイナミックに生成される．これを「身体性」と称する[2]．

散歩をしていて思いがけないものに遭遇したり，あまり目を留めたことのないものごとにふと着眼してそれを基に自由な発想が湧き起こったり，お風呂に入っていると思いがけずアイディアが湧いてきたりするのは，身体性がなせる業である．これも認知の能動的な側面である．

4. 認知の能動性その３：世界に自身を連れ出し，出逢い，考え，振る舞う

状況依存の思想のポイントは，ひとはある外界状況に接してみるまでは，そこで自身の心身がどう振る舞うかを予測できないという点である．これまでに心理学や認知科学で判明しているひとの普遍的な行動パタンは，ひとが営む思考や振る舞いのほんの一握りにすぎないのではないか．知能の学問は心身が有する潜在的な身体知の多くをまだ把握できていない[2]．身体が有する知は未だ大いなる暗黙知である．

状況に遭遇したとき心がどう思考しはじめ，身体がどのように振る舞いだすのかは，事前に予測がつかないにもかかわらず，いざ遭遇してみると心身は臨機応変に，外界の何かに着眼し，能動的に知覚や思考を生成し，ときには創造的な行動を繰り出すことができる[1]．身体を有するからこそ，その気になればどこにでも行ける．そしてそれぞれ場所で新しい状況に遭遇し，その場で能動的に認知を構成する[4]．

5. 認知科学の研究のありかた

状況依存性や身体性が有する深淵なメッセージはなにか？　それは認知科学という学問のありかたを揺るがすほどの大きなメッセージであると私は考えている．

前節までの議論を総合すると，身体がさまざまな場所で状況に遭遇してはじめて，あまりそれまで顕在化されたことのない認知の姿（暗黙知）が浮き彫りになる可能性があるということになる．

私が同志の研究者[1]とともに提唱してきた「一人称研究」は，認知研究に立ちはだかる状況依存性という壁を逆手にとって暗黙知を顕在化させる，ひとつの有力な研究手法である．それは，自らの身体を外界に連れ出し，心身と外界を状況依存的に出遭わせ，そこで生起する自身と外界のインタラクションの様を，三人称視点だけでなく一人称・二人称視点も併用して観察・記述し，それによって体感やことばでできることを進化させながら，生きるアクチュアリティに潜む知についての先見的な仮説を立てる研究[4]である．

文献[4]に詳説したカフェの居心地の一人称研究はその典型である．研究をしてみるまでは，私自身がカフェ空間にどのような居心地を見出し，どう佇むのか，そしてカフェと心身のあいだで生起するどんなものごとに価値を見出すのかは，ほとんどベールに包まれていた．既に意識できていることは一部あったものの，この研究をして初めて顕在化した「私自身の過ごし方や居心地の感じ方」が多数あることが明らかになった．

顕在化した知の姿は未だ仮説に過ぎない．取るに足りない認知であるとの印象を与えるかもしれない．しかし，より多くのひとが身体を外界に連れ出して一人称研究を行えば，多種多様な認知の姿が仮説として出揃う．それを基にして普遍的な知や個人固有性を孕む知が姿を見せはじめたとき，認知科学は変貌を遂げる．

文献

[1] Clancey, W. J., (1997) “Situated Cognition: On Human Knowledge and Computer Representations”, Cambridge University Press, Cambridge.
[2] 諏訪正樹, (2016). “「こつ」と「スランプ」の研究 − 身体知の認知科学”，講談社選書メチエシリーズ，講談社.
[3] リサ・フェルドマン・バレット, (2019) “情動はこうしてつくられる　脳の隠れた働きと構成主義的情動理論”（高橋洋　訳），紀伊国屋書店.
[4] 諏訪正樹, (2022) “一人称研究の実践と理論　−「ひとが生きるリアリティ」に迫るために”，近代科学社.

[1] 本 OS を共同企画した藤井晴行氏はそのひとりである．